

調査・研修等計画届出書

令和 元年 5月 24日

瀬戸市議会議長 様

議員名 白井 淳



政務活動 として、下記のとおり調査・研修等を実施いたします。

記

期 日	令和 元年 6月 1日から 6月 1日まで(泊1日)	
調査先・研修名	子ども虐待防止シンポジウム「虐待の背景に潜んでいたもの」	
会場名(会場所在地)	大阪歴史博物館 講堂	
調査・研修の目的 (今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて)	<p>昨年千葉県野田市で小学生の虐待死事件が起きましたが、虐待事件が起きると、加害者の保護者や学校への対応等に批判が集中するばかりで、児童虐待の具体的な解決につながっていないのが現状ではないかと思えます。そして、現在の教育や子育て支援が、子どもに向き合っていないことが物語っている。いつも大人の都合が優先され、大人同士のトラブルを避けるため子どもが犠牲になっているように感じます。</p> <p>そのため、瀬戸市の状況をふまえて、子ども虐待を防ぐために、同シンポジウムの専門家のひとたちと一緒に考えたいと思えます。</p>	
議長名の依頼	要 ・ 不要	依頼先(名称)
		なし
同行者名	なし	

※行程表を添付してください。

調査・研修等報告書

令和 元年 6月 3日

瀬戸市議会議長 様

議員名 白井 淳



政務活動として、下記のとおり調査・研修等を実施したので報告します。

記

期 日	令和 元年 6月 1日から 6月 1日まで (泊1日)
調査先・研修名	こども虐待防止シンポジウム「虐待の背景に潜んでいたもの」
会場名(会場所在地)	大阪歴史博物館 講堂
調査・研修の目的 (今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて)	<p>今年千葉県野田市で小学生の虐待死事件が起きましたが、虐待事件が起きますと、加害者の保護者や学校への対応等に批判が集中するばかりで、児童虐待の具体的な解決につながっていないのが現状ではないかと思えます。そして、現在の教育や子育て支援が、子どもに向き合っていないことが物語っている。いつも大人の都合が優先され、大人同士のトラブルを避けるため子どもが犠牲になっているように感じます。</p> <p>そのため、瀬戸市の状況をふまえて、子ども虐待を防ぐために、同シンポジウムの専門家のひとたちと一緒にどうすればよいかを考えたいと思えます。</p>
調査先の事業の現状・課題 / 研修で学んだこと・キーワード等	
<p>SOS はなぜ届かない。3つの虐待事件の事例報告 (ルポライターの杉山春氏)</p> <p>① 愛知県武豊町3歳児餓死事件 ② 大阪市西区二児置き去り死事件 ③ 厚木市児童2007年死亡 2014年に発覚事件</p> <p>3つの事件に共通するのは、加害者のこども時代から圧倒的に孤立していた。経済的に問題があった。社会への不信(自分自身を信じられない)と恥辱。孤立は未来を支えられない。無謀に見える行動。→ 地域の人たちや共同体の中で関わる事ができない。近所のひとたちと価値感が違い、経済的な格差が生じていた。そして、社会との繋がりを失う状況に陥っていった。=社会からドロップアウトする。地域から見えなくなってしまう、親の精神状態が悪化し子どもを隠してしまう傾向</p>	

調査先（主な質疑・応答内容） / 研修（受講後の感想）

★ 報道のあり方に問題がある。

一般的に、虐待（ネグレクト）事件のこどもを死なす報道を新聞・テレビなどを通じて知ることになるが、まず保護者へのバッシングと「何をやってたんだ」と関係機関（行政）への批判的な意見の情報が主に流され、本質的な問題（どんな状況と問題があったのか）が隠されてしまい、適切な情報提供が行われていない問題がある。

★ 虐待の背景に家族主義と就労問題、社会側にも問題がある。

3つの虐待事件では、母親、父親は若年（10代後半、20歳）世代で養育能力が低いことと併せて、家族規範性が強い。母親なら子どもを育てることができて当た前えの風潮と父親は仕事をしなければならないという価値感が強い。そして、2008年のリーマンショック後、日本全体では、非正規雇用を含め子ども貧困と女性の貧困問題が浮上した。不安定への不安、評価が低くければ社会に居場所を見つけることが困難になる。女性が産むことと就労及び社会保障に脆弱な面がある要因に、先進国中、女性の社会的地位の問題と関わっていることが行政や企業、一般的に関心度が低いまま。生活が困窮すれば、社会的孤立を招き排除されてしまう。

★ 虐待事件の報告を受けて考えたこと どこかのポイントで防ぐ前に、助けるための正しい知識と個人を支える体制、そしてネットワークを張る力が必要になる

調査・研修の成果・考察

（瀬戸市への反映・自己の能力開発への寄与等）

どこかの時点で虐待を防止できるところがある。



現在、瀬戸市家庭児童相談室に虐待や育成相談の状況は、年間1176件の上り近年では、ほぼ横ばいの推移を辿っているが、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト等の養育相談では、年々身体的虐待相談が増えている傾向にあるのが心配。年齢別では、0歳児～3歳児が約21%、3歳児～学齢期約27%、小学生約30%を占めている。そして、虐待者の多くが父親（55, 3%）、母親（41%）の状況。虐待予防として、養育支援訪問事業（約400軒）とあかちゃん訪問事業（640軒）を実施している。妊娠時期から、保健師・看護師が各家庭を訪問することで、育児相談を含めて早期にリスクの高い家庭を把握し、虐待・ネグレクト防止につながる事業を行っている。

行政の課題は、瀬戸市において、他市のように虐待死亡事件のような大きな問題は起きてはいないが、心配な家庭や孤立しているハイリスク家庭（DV・虐待・育児放棄）が見受けられる。保健師・保育士・看護師等の専門的職員数は十分でなはない状況。発見から支援まで、出来るだけ早くキメ細かく行う必要があるため、職員を育てる。増員が可能ならいいが、財源が厳しい折、地域住民の人たちとの連携も重要視していくことも考えなければならないと思う。